

共に留萌地域の未来を創る ～留萌地域の強みを活かした生産空間の維持・発展～

開催概要

- ◎日時：令和6年9月17日（火）13:30～16:00
- ◎会場：留萌市文化センター 大ホール（留萌市見晴町2丁目）
- ◎参加：約520名
- ◎プログラム

- 第9期北海道総合開発計画の紹介
- 北海道総合計画の紹介
- 基調講演 「留萌地域のポテンシャルを考える」

北海学園大学工学部教授 鈴木 聡 士 氏

- パネルディスカッション 「共に留萌地域の未来を創る」

☆コーディネーター 北海学園大学工学部教授 鈴木 聡 士 氏

☆パネリスト（五十音順）

inakaBLUE 代表 小笠原 宏 一 氏 氏

NPO法人留萌観光協会 会長 佐藤 太 紀 氏 氏

株式会社 モンバル 常務取締役広報本部長 竹山 史 朗 氏 氏

株式会社丸夕田中青果 常務取締役 田中 美智子 氏 氏



【基調講演】鈴木教授



パネルディスカッション



小笠原 宏一氏



佐藤 太紀氏



竹山 史朗氏



田中 美智子氏

主な発言内容

- 鈴木教授：①再生可能エネルギー②食と観光③交通結節点としての道の駅活用がある。100年に1度くらいの大きなチャンスが留萌地域に来ている。再エネを活かすこと、観光・食・レジャーの街として情報発信を強化、生活に便利で快適なまちづくり（15分都市など）により、観光客にも住民にも魅力的な地域づくりを目指すことが重要。

<課題とその対応>

- 小笠原氏：（漁業改善プロジェクト等実施にあたり）合意形成が大事だが、困難な場面も出てくる。個人の温度差はありつつ、誰かが引っ張って動きやすいようサポートし、どう輝かせていくかが大事。
- 田中氏：（ニシン漬けについて）客層を考えると、アナログとデジタルの融合が課題。実際に商品を歴史とともに感じてもらう必要。そのためにはリアルで体験する必要があり、交通インフラは不可欠。
- 竹山氏：留萌の知名度を上げることが課題。拠点ができることにより人の流れが変わる事例も。来訪者だけでなく、地元にも利用されることが重要。
- 佐藤氏：人口減少、駅の跡地と道の駅の一体的連動、広域連携が課題。拠点間のネットワークづくりと交通ネットワークの形成が重要。人口減少への対応としては、定住人口（住みやすさ、レジャーなどの活用）、観光への攻め（消費人口増）、地域の守り手（雇用の確保、災害対応に必要な建設業）を考える必要がある。道の駅のもいは、来場者37万人をさらに増やし、まちなかへの人流を作り出す拠点のみならず、留萌100年に一度の転換期において地域づくりの起点として”コミュニティ・ハブ”として活用すべき。

<地域の将来に向けて>

- 小笠原氏：目指すのは田舎。コミュニティがありワクワクするような空間を作っていきたい。皆が地域のことを知り、前向きに挑戦する気持ちを忘れないことが重要。プライドを持って住み続けられる未来に繋がる。
- 田中氏：子どもたちが懐かしいという舌に残る記憶が大事。食育を通じて故郷の味を後世に残したい。外販は留萌の魅力伝えるきっかけのフェーズ。留萌に来てくれる人を増やし大地に根ざした商売の仕方を続けたい。
- 竹山氏：全体をどう見せるかという視点も重要。訪問者にここは違うな、と感じさせるデザイン・センスのある地域になってほしい。
- 佐藤氏：税収を増やし、雇用、投資、資産価値の向上を考えたい。経済活動により増えた税収を公共投資し生産空間を維持するスパイラルアップを目指す。このような官民のサイクルが「共創」に繋がる。
- 佐藤氏：どこで何をやったかは記録に残るが、誰とどのように、という記憶に残る視点が必要。地域づくりに終わりはない。